

「ベルリン国際映画祭 若手日本人監督海外プロモーション」

参加レポート

野原 位

- 本事業への参加前と参加後で自身が最も変わった点

今回、自分の企画趣旨を何度となく説明しながら考えが深まっていく中で、海外撮影、海外のスタッフ・俳優（日本にいる外国人スタッフや俳優も含む）との仕事にチャレンジする可能性についてもイメージした。そうすると、やはり自分自身英会話がスムーズにできた方が格段に広がりが見られる、特に演出面においてそうだろうと想像できた。一朝一夕に習得できることではないので、まずは心持ちを変えることからでも始めねばと感じ、改めて数年ぶりに勉強を再開した。

ピッチで様々な国の方と出会いながら、大陸の中で国同士が繋がっていることについて漠然と意識することが多かった。私の企画は舞台を日本、韓国で出したが、ヨーロッパの方々にピッチをしながら、経験と教養不足で内容がアジア圏を越えられない自分の視野の狭さを感じていた。日本という島国にいて、日本語以外の他言語でも他者と関わっていこうという積極的な姿勢が持てないことには、日本の外に出せる作品を作ることは、今の私には難しいと思った。

英語力不足の件も含め、結果的に、自分に欠けているものが何なのか、もしそれが補えたのであれば自分が本当に映画でやりたいことはどういうことなのか、ということに真摯に向き合えた5日間で、これまで自分の中で整理できていなかった多くの問題点が一扫される感覚があった。

- 今後企画をすすめるにあたって最も意識したいと思った点

これまでの自分では何らかの理由をつけて避けてきた選択肢を選べるよう尽力したいと思った。例えば先述した英語の件などがそうだ。

企画を説明する中でピッチの相手の方々からさまざまな質問を投げかけられた。中には「あなたはなぜ映画を撮るの？」という質問まであった。回答を考える度に「なぜ自分はこの企画をやりたいのか」「この映画の中で何をしたいのか」を自分に問うことになった。そのおかげで、設定や内容を今考えているよりもっと掘り下げて見直してみたいと思えた。

- 本事業に参加して得られた気づき

日本国内であっても監督が正式な場でピッチをするという機会はなかなかない。今回、渡独前の事前講習でも「ピッチはプロデューサーがすることが多い」と講師の方から言われていた。現地でピッチをしている中でもその方が合理的だと感じる場面はあった。

ただ監督の立場でピッチをして良い点もあった。前回答とも重複するが、内容に突っ込まれたり、意外な意見を聞くことで、この企画の強みは何なのか、自分の中の曖昧な部分に気づかされ、私自身が内容を精査することができた。

また何より今回、10 数人の方と話をすることで、ピッチという全く未知のものをしっかりと体験できたので、今後急にそのような機会が来ても臆することなく臨めると思う。その点でも非常にありがたい機会だった。

- 今回の参加を通して気づいた海外展開の難しさ（個人でも日本映画全体でも）

生々しい話だが、ベルリンのフィルムマーケット開場で色々な方と話したり見学する中で、日本映画は注目されていないという感触だった。アジア圏では韓国映画や台湾映画に注目が集まっている印象だった。隣の韓国 KOFIC のブース、台湾の新人監督・プロデューサーたちが流暢な英語でピッチするイベントを見学した際にはそれを肌で感じた。

台湾の新人監督の場合は、初長編のピッチですでに MK2（フランスの映画制作会社）がワールドセールスについていたり、出演者が有名な方々ばかりで、その規模感にも驚いた。また、我々がピッチをする中で、実際に「日本映画はクオリティが低いとされている。特にポスプロで顕著である」と聞いたことは印象に残っている。それは、私が普段の映画制作の中で感じている点でもあったので、ポスプロに費用をなかなか割けない日本映画の弱点が世界の映画業界でしっかり認知されていることに落胆した。

また、ピッチをする中でよく聞かれたのは「シナリオはできているか？」ということだった。企画概要を説明して興味を持ってもらえたとしても、結局「シナリオが完成したら読ませてください」という話にしかない。

しかし、シナリオを執筆しそれを英訳するまでもに製作費はかかる。日本の若手映画監督の制作において、そのための十分な資金が用意されているケースは少ないだろう。

- 今回の参加を通して気づいた海外展開の可能性（個人でも日本映画全体でも）

海外でのピッチ経験のある方々に常々言われていた通り、日本映画制作での常識は通じない、ということを感じた。その際たるものが予算である。

フランス大手のワイルドバンチの方にピッチした際、予算を 2 億円程度と伝えたが（それですらかなり盛った金額だ）、「そんな安いお金で長編が作れるのか」と聞き返される始末。国によって物価などが違うとは言え、人件費を始めとする制作費の何もかも桁が違う。個人的には、必ずしも規模が大きい方が良いとは思わないが、制作費は当然ながら関係する全て

の人の士気、ひいては映画全体のクオリティーに影響する。現場で起こるパワハラ、セクハラ問題も日本映画の「貧しさ」に端を発していることも多いと考えている。厳しすぎるスケジュールの中で行われる撮影、追い詰められるスタッフ、俳優たち…。さらに、その結果得られる対価が見合っていない、という負の循環が起こっている。

日本の映画監督も、スタッフも、俳優たちも、ほとんどの方は皆置かれた環境の中で必死に、精一杯やっていると思う。今より多く海外との共同制作の機会を見出し、そこから継続的に映画制作をできるようになれば、純粋に面白さを追求したクオリティーの高い日本映画があらこちらから出てくるのではないか。

先のワイルドバンチの方の話で印象的だったのは「海外では長編映画を撮るまでにかなりの選別を受け、さらに長編 2 本目を撮影できるのはその中の 10 人に 1 人程度」ということ。世界で闘って評価を受けるというのは並大抵ではない。それでもまずは海外制作チームと同じ土俵に立たなくては、自分たちの映画が世界でどう受け取られるのか、何もわからない。そのための機会創出が急務だと感じている。

最後になりますが、今回の貴重な機会を与えていただいた文化庁、ユニジャパンの皆様には大変感謝しております。ありがとうございました。

自分にとって今後の映画制作に大きく影響する経験になるだろうと感じています。厳しい現実を突きつけられた所もありますが、一方で映画というのはどこで制作しても世界中に届きうる媒体であることを改めて感じられたことは今後の糧にもなりました。引き続き映画制作に精進していきたいと思えます。

